

Momo Kodama

児玉 桃 メシアン生誕100年に注ぐ “静かな情熱”

児玉 桃がライフワークのひとつとするフランスの作曲家、メシアン。
2002年の《幼子イエスに注ぐ20のまなざし》全曲演奏会や05年の同曲のCDで、
メシアン演奏の第一人者としてひととき鮮やかな印象を残した彼女が、
メシアン生誕100年を記念するリサイタルで彩の国さいたま芸術劇場に登場する。
気鋭のヴァイオリニスト、戸田弥生との《ヴァイオリンとピアノのための幻想曲》
日本初演も聴きどころだ。

文＝真嶋雄大（音楽評論家）

児玉桃が彩の国さいたま芸術劇場に再び登場する。顧みれば
2003年10月、姉児玉麻里とのデュオピアノによるストラヴィンス
キー《春の祭典》は語る言葉を失うほど鮮烈だった。またそれより
以前「ピアニスト100」のステージに立った折も、煌々ような感性
に圧倒された。

彼女のあくまで清冽なタッチは千紫万紅の彩りを帯び、それが
グラデーションを描くように変化していくから**ふくいく**たるファンタ
ジーが織り上げられる。細部にまで木目細やかに神経を行き届か
せ、閃きと理性が調和する極めてみずみずしい情感は彼女独特
の発露だ。だからこそ彼女が向かい合うバツハから現代に至る作
品たちには、須らく自然で芳醇な生命力が宿るのであろう。

さらに最近顕著なのは、メシアンに対する取り組みである。別
けても2002年の《幼子イエスに注ぐ20のまなざし》全曲リサ
イタルや、2004年名古屋フィルのヨーロッパツアーで共演した
《トゥランガリラ》は各方面から絶賛された。前者は2005年CD
でもリリースされ、その凜とした演奏を目の当たりにできる。来年
生誕100年を迎える20世紀フランスを代表する作曲家オリヴィ
エ・メシアン（1908～92）は、神学者や鳥類学者でもあり、独特の
アプローチによる宗教曲を初めとする斬新な作品を数多く発表
した。その未亡人であるイヴォンヌ・ロリオは優れたピアニストと
して、また教育者としてパリ音楽院で数多の才能を育てている。

パリ音楽院に学んだ児玉桃は、ロリオと直接の師弟関係はな
いものの、12、3歳の頃から親しく交流し、助言なども得ていたと
いうから作品解釈についても深く探求したのであろう。

今回演奏される《ヴァイオリンとピアノのための幻想曲》は、ロ
リオに託されて児玉が昨年のラ・ロック・ダンテロン音楽祭で世
界初演を果たしたメシアンの未出版作品である。それがこの彩の
国で戸田弥生と日本初演されるのだ。

戸田弥生の音楽は実に厳しい。それはストイックなほどであるが、
と同時に彼女は自身が持つふくやかな情感と精神的コントロール

を類希なバランス感覚で融合し、互いに際立たせる非凡なヴァイ
オリニストでもある。児玉桃と戸田弥生、突出した2つの個性が出
会うとき、どんなにか華やかで、どんなにか内省的な音楽が紡が
れていくのだろう。

加えてメシアンがこよなく愛し、その作曲家としての土壌とも
なったドビュッシーとラヴェルが同じステージで演奏される。彼女
のピアノから飛び立っていく音楽は、空間や次元を超えて私たち
の心に深く刻まれるだろう。

フランス音楽の真髄を希求する演奏会になることは間違いない。

profile

児玉 桃（こだま もも）

大阪生まれ。1歳で渡欧し、幼少よりパリ国立音楽院教授ムニエ女史に師事。13歳の時、最年少最優秀で
パリ国立音楽院に入学。16歳でピアノと室内楽のクラスを審査員全員一致のプルミエ・プリで卒業。セニガ
リア、エビナル両国際コンクール第1位。ミュンヘン国際コンクールに最年少の19歳で第2位（1位なし）。
1994年度アリオン奨励賞。97年第7回出光音楽賞。現在パリを拠点に、バツハからメシアンに至る幅広い
レパートリーで活躍の場を広げている。



guest

戸田弥生（とだ やよい）

1985年第54回日本音楽コンクール第1位。桐朋学園大学
音楽学部を首席卒業後、1992年アムステルダム・スウェー
リンク音楽院に留学。93年、エリーザベト王妃国際音楽
コンクールに優勝して一躍注目を集める。96年にはニュー
ヨークのジュリアード音楽院より“ディレイ・スカラシップ”
を受け、1年間在籍。97年ニューヨーク・デビューを果たし
絶賛を受ける。使用楽器は、上野製琴株式会社より貸与さ
れている1740年製ピエトロ・ガルネリ。

●●●● MUSIC ●●●●

児玉 桃 ピアノ・リサイタル
～メシアン生誕100年を記念して～

【日時】 2008年3月1日（土） 開演 14:00

【会場】 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

【出演】 ゲスト＝戸田弥生（ヴァイオリン）

【曲目】 メシアン：《鳥のカタログ》より〈クロサバクヒタキ〉 ドビュッシー：《前奏曲集》より

ラヴェル：夜のカサール

メシアン：《幼子イエスに注ぐ20のまなざし》より〈よろこびの聖霊のまなざし〉（ほか

【チケット（税込）】 好評発売中

一般：S席4,000円／A席3,000円／学生A席1,000円 メンバース：S席3,600円／A席2,700円

❁ オリヴィエ・メシアン ～まろうど稀人からの恩寵～ ❁

メシアンは、単に20世紀を代表する大作曲家とだけでは括
れない。高名な神学者でもあったし、宮沢賢治のように、音を
聴くとある色彩を鮮烈に思い浮かべるといふ特殊な能力も
持っていた。また自然を愛し、鳥類学者として世界中の鳥の鳴
き声を楽譜に残す、という前代未聞の偉業も残した。

日本でも1962年に軽井沢に赴き、当地の鳥の声を採譜し
た。それもホトトギスやウグイスなどの声を一種類ごと書き
留めるのではない。鳴き方に様々なヴァリエーションがあり、
地元の専門家ですら覚えられないような鳥たちが一斉にさえ
ずる様子を、丸ごとオーケストラ用の巨大な楽譜に書き分け、

人々の度肝を抜いたのだ。そしてこのときの経験をもとに、メ
シアンは《7つの俳諧》という作品を生み出した。

彼は、鳥をテーマに作品を書くときはいつも、その鳴き声を
忠実に再現するだけだという。だが実際にできた音楽は、本物
の鳥以上に詩的で、哲学的で、愛があふれている。

演奏は困難を極めるメシアン作品だが、聴く者には何の難
しさもない。目の前に広がる極彩色の世界にひたすら浸り、想
像力のリミッターをはずせば、やがて至福の時が訪れるのだ
から。

文＝長野隆人（フリーライター）